

名戸ヶ谷ビオトープだより

第28号

2007年12月1日

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会発行

<http://nadogaya-biotope.org/index.html>

発行責任者： 篠崎 将 Tel/Fax: 04-7173-6353

初杵下ろしで始まった収穫祭



天候にも恵まれた第5回目の収穫祭は11月3日(土)、12:00から、名戸ヶ谷ビオトープの木村さんの敷地の一角で開催された。不安感の上村氏の助けと、昨年の実行委員長窪田氏が残してくれた詳細な記録を参考にすることで解消され、なんとか重責を無事果たすことができた。今年は多少財政的にも余裕があるため、例年借用していた大鍋、やかん、ボール、バット、等の什器等を買揃えることができた上に、春山氏から臼、杵一式の寄贈を受け、収穫祭に必要なものが全て自前で整えられた。

献立は恒例のお餅、バーベキュー、不耕起米のオムスビ、汁物としての「おでん」、付録として蒸し芋、焼き芋。おでんは前日から外川、上村宅で下ごしらえ。オムスビも同じ。

参加者は当初20名程度が見込まれたが、名戸ヶ谷小校長、柏市環境保全課長などの参加を得て、30名となった。心配された当日の天候も、昼頃からは陽も差し始めて穏やかなよい一日となり、天候にも恵まれた収穫祭は和気あいあいのうちに午後1:30分頃に閉会した。(収穫祭実行委員長 外川 克之)

「豊年留客足鶏豚」(豊年だ客をもてなす馳走もたくさんあるよ)とまではいきませんでした。皆さんの明るい笑い声が一番のご馳走となりました。後日、木村さんのおばあさんから「今年の米はとともおいしかった」と言っていたのが何よりの励みです。(収穫祭副実行委員長 上村憲治)

ひとくちインタビュー 女性の方々から聞きました

初参加ですが、温かいうるおいの園に来たみたい(安斎光恵)。
こんなに楽しく美味しいとは、食べきれないほどです(佐藤郁子)
すばらしい大自然の中で皆さんのほのぼのした人柄がしのばれる料理を味わえるなんて本当にすばらしい(宮本恵代)。
一年の締めくくりの収穫祭って楽しいですね(峰村純子)。



名戸小の脱穀終了

今年の半分の収量

雨のため、二度も延期になった名戸小の脱穀作業だったが、10月4日ようやく決行。作業は2クラスが1時間ずつ交代で行う。雨続きのため稲藁はまだかなり湿った状態だったが、児童たちは脱穀機から出る土ほこりに顔をしかめる子もいたが、会員に手伝ってもらいながら、楽しそうに一人二束ずつの「稲こき」をこなしていた。唐箕による選別作業も順調に進み、児童参加の部分は午前中に大方終了。検量の結果は85kgで、今年の150kgに比べると相当の減量となった。猛威を振るった雑草が恨めしい。

最後に、児童代表の挨拶「私たちの人生のよい思い出になるでしょう」の一言に拍手。(村川五郎)



強風下名戸小ふれあいの集い

11月23日(祝)朝から強風が吹き荒れる中、早朝8時前から集合。窪田・山谷さんの現場指揮で餅つき準備を開始。強風に熱を奪われ、思うように蒸あがらず苦労したが、凡そ10臼の餅を児童も参加して搗きあげた。最初の「目つぶし」は大人が、次いで子どもたちが交代でつきあげる。普段ビニール袋入りの餅を見慣れている子どもたちには、もち米が潰されて餅になっていくプロセスは物珍しかったようだ。特に田植えから参加した児童にとっては感慨ひとしおのようで、ザリガニが怖かったこと、泥がヌルヌルして気味悪かったことなど、話してくれた。



現在中二の卒業生が一人、最後まで付き合い、骨身惜しまず働いてくれたのには感心した。こうした子がいると我々もやり甲斐があるというものだ。もう一つ紹介しておきたいのは、米づくりに参加した児童たちの寄せ書きである。自主的に作ったものだが、全員が感想を寄せ書きしたもので、それが米の字の形に構成されている。初めて体験した米づくりが想像以上に思い出深いものだったのかなと思ったひと時であった。(村川五郎)

ビオトープ観察会に参加してー10月25日

名戸ヶ谷小4年1組 永野 健斗

ビオトープには沢山の生き物がいました。最初にコバネイナゴ、クビキリギリスなどの昆虫について篠崎会長さんが説明してくれました。それからカダヤシとメダカの見分け方も教えてくれました。普段見慣れている植物の名前や見分け方もよくわかりました。九州にしかないチョウがビオトープに来ていたのは地球が暖かくなったからなのかなと思いました。今度は植物の冬越しを見てみたいと思いました。

第6回定期総会のお知らせ

日時:2008年1月26日(土)
10:00~11:00

会場:南部クリーンセンター
(3階大ホール)

秋の生態系調査

10月29日(月)、柄澤先生を招いて秋の生態調査を行いました。今年はなんとなく例年と比べ虫の鳴き声が少ないように感じました。しかし、実際に調査してみると、主なものだけでも40種類以上の生きものと出会うことができ、ビオトープは相変わらず生きものたちの格好の住処となっていることを確認できました。数的にはバッタの仲間が多く見られ、特に珍しい生きものではないのですが、変わったところではカネタタキやウスイロササキリなどが確認できました。カネタタキは、鳴き声がチンチン鳴らす鉦(かね)の音に似ていることからその名前がついたと言われます。ウスイロササキリは触覚が非常に長く華奢なササキリの仲間で、数は決して少なくないのですが、近づくと葉の裏にすぐ隠れてしまうので姿は意外に見かけられないバッタの仲間です。他にはお腹を大きくしたカマキリなどが多く見られました。

(松清智洋)



生きもの観察会

11月4(日)、収穫祭の翌日、生きもの観察会を行いました。お天気に恵まれて、10人を超える参加者があり、活気あふれる観察会になりました。例によって子どもたちに網を持ってもらい、生きものを捕まえてもらいましたが、多くの子どもたちはやはり水の中の生きものを中心に追いかけていました。

なかなか網の使い方がわからず、生きものの気配はするが網に入れることができない子どもが多く、親子で苦労している姿も見られました。意外に多くの生きものが身近にいることを知って、どちらかという親の方が感心する場面が多く見られました。(松清智洋)



腐食が進むBゾーン木道

9月20日に近隣の皆さんや回生の里に入居されている方の散歩コースであるBゾーンの木道基礎が腐食で通行止めになりました。早急に改修すべく、環境保全課に材料の手配をお願いし、10月6日、7日に工事を行いました。杭は何とか使えましたが、根太(踏み板の下の丸太)が腐っていましたので取り替えて、踏み板も新しくしました。しばらくは大丈夫でしょう。近隣のおばあさんからは感謝の声もあり、うれしかったです。

(小笠原 智)



写真左： Bゾーンの中央木道の補修作業(8月18日の合同作業日に)

写真中： Bゾーンの三角池前の腐食木道 (10月6日)

写真右： 作業完了後の木道

ピオトープの生きもの



キチョウ シロチョウ科

東北地方北部では少ないが、日本全国で見られる。3～5月に見られるものは成虫で越冬したもので、羽化したものは6月上旬からあらわれ、晩秋まで見られる。夏型はオス、メスとも翅表の黒縁が強く無紋であるが、晩秋型は写真のように黒縁がなく、全面に斑点がある。モンキチョウと似ているが、キチョウは前翅の長さが20～25mmで、ひとまわり小さい。食草はマメ科の植物で、ハギ類、ネムノキ、アカシア類など。



オオアイトンボ アイトンボ科

本州、四国、九州で見られる。腹の長さは33mmぐらいで、イトンボの中では大型種。体も尾もメタリックグリーンで金属製のように見える。卵は水中だけでなく、水面上に張り出した枝などにも産み付けられる。一般にイトンボ類は止まっているとき翅を閉じているが、オオアイトンボは写真のように広げている。11月4日、観察会の際、Bゾーンの三角池の傍らで観察した。(篠崎 将)

手賀沼ふれあいうオークでピオトープ展

11月11日(日)、今年で10回目を迎える手賀沼ふれあいうオークが柏会場(柏ふるさと公園)、沼南会場(道の駅しょうなん)、安孫子会場(手賀沼公園)の3会場で開催されました。生憎の悪天候で雨まじりの大会となりましたが、参加者は年々増え続け、今回は3,500人の応募があったとのこと。柏会場では、環境団体、医師会・薬剤師会、NPOなどの各種ボランティア団体の出店など約30のブースが広場を囲み、その中でレイソルダンスや柏ソーラン隊の踊り、ベーごま、けん玉などなつかしい遊びが披露されました。わがピオトープを育てる会は、パネルを11枚展示して、足を止めてく



れた人たちにピオトープの現況と活動をわかりやすく説明しました。都市化された身近な場所にこんなたくさんの自然が残されていることに思いを新たにしていました。悪天候にもかかわらず家族連れで楽しんでいる人も沢山いました。(上村憲治)

編集後記：収穫祭も無事に終了。それにしてもこの一年、ピオトープはさまざまな試練に晒されました。異常な猛暑による雑草の異常な繁茂。養分を奪われた水田と昨年比6割弱の収穫。その中でも、今年の不耕起米はとても美味しかった、とあちこちで耳にしたのは嬉しいことでした。今年は収穫祭の後にも切り藁・有機肥料の散布を丹念に行いました。併せて水路を含めた田んぼの補修作業も。この一年の苦い経験から学んだことを来年に活かして新年を迎えましょう。
広報編集部(春山)